

愛する歌 命かける

カウンターテナー 藤木大地、再始動

新型コロナウイルスの影響による公演の中止・延期が続いた大津・びわ湖ホールで主催公演の再開を飾ったのは、日本を代表するカウンターテナー歌手・藤木大地のリサイタルだった。藤木自身にとっても舞台は約5か月ぶり。「歌えない、歌わない、初めての経験」となった自粛期間中は、落胆、不安、決意……と様々な感情で揺れ動いたという。再始動の節目に思いを聞いた。

(青木さやか)

コロナ禍以前の公演は2月15日、俳優の大和田獏、美帆親子の朗読に合わせ、東京文化会館で上演した歌劇「400歳のカストラ」

ト」が最後となった。特にシヨックだったのが、東京・新国立劇場で予定されたヘンデルのオペラ「ジュリオ・チェーザレ」の中止。

稽古中に知らせを聞き、「一人でやけ食いするしかなかった」と苦笑する。

自宅で過ごした日々の間、つらい出来事が続いた。4月6日にテノール歌手・鈴木寛一が敗血症で死去。自身がテノールから女声の音域を歌うカウンターテナーに転向した時も喜び、世界の舞台に送り出してくれた恩師だ。連絡を受けた翌7日は、くしくも自身が3年前にウィーン国立歌劇場



恩師の死… 舞台へ決意新たに

18日のリサイタルでは、ピアノ伴奏を務めた加藤昌則や酒井健治ら、現代の作曲家による新曲も多く披露した(びわ湖ホール提供)



でデビューした日。「恩返しできた」と思っていただけに、シヨックはなおさら大きかった。

同じ4月には、共演した大和田の妻で女優の岡江久美子がコロナ感染による肺炎で、同世代のテノール歌手・二塚直紀も心筋梗塞で、それぞれ世を去った。

一時は「歌いたいたとも思えなかった」というが、命について真剣に考えたことで、再び歌に向き合う契機にもなった。「自分に残された時間はどれだけか。やりたいことのために時を紡いでいきたい」と思っている。

「明日声が出なくなっても、たとえ死んだとしても、『最後の公演があれで良かった』。そう思えるように生きていきたい」

びわ湖ホールと自身の「再出発」にあたるリサイタルは今年18日。6月から本格的に再開した練習中、ピアノ生の生音に声を合わせる感動がよみがえり、「このために今まで勉強し、活動してきたんだ」と喜びがこみ上げた。

公演冒頭で「観客へのサプライズ」として歌ったのは、「天上の響きがする」というマーラーの交響曲第2番「復活」の「原光」。この曲には「ホール復活のために歌う」との思いを込めた。「椰子の実」や2月に上演した歌劇「400歳のカストラ」の劇中歌も披露。澄み切った高音を隔々に響き渡らせた。

10月4〜12日には、新国立劇場の再開後初となるオペラ「夏の夜の夢」で主役を務める予定だ。「命がけで歌いたい」との思いを強くし、改めて前を見据える。

「コロナ」という言葉は口にしなないようにしたという。「話題にするだけで気持ちで負けて、侵されてしまうような気がした」と振り返る。2019年1月、宇那木健一撮影